

**第13回 大阪
民草の和をつなぐ会
「日本文化の荒魂」**

令和4年5月21日

万物万象一元一体 大調和を目指す日本文化

神代初設之時 於高天原成神

天之御中主神

高皇產靈神

神皇產靈神



大調和を創造する エネルギー

和魂 と 荒魂

ニギタマ

アラタマ

和の創造

和魂：和を推進するエネルギー

荒魂：和の障害を取り除き

壊れた和を修復するエネルギー

和魂と荒魂は一元の本性

- **元元** 荒妙(アラタエ)、荒稲(アラシネ)
手間 和妙(ニギタエ)、和稲(ニギシネ)
- **元、帰元** あれる、あらぶる(修理)(反始)
安定成長 にぎわう、なごむ(固成)(報本)

鹿島神流

- ◆ 顕宗天皇 (在位485～487)の御世、天兒屋根命を先祖とする鹿島神宮神官國摩真人が、武甕槌命の御神徳「祓太刀」を「神妙劍」として顕現「鹿島の太刀」
- ◆ 大日本は神国なり。神の産み給える国にして神産む国なり。**神武とは神産むの意**なり。(中略)

即ち武は天下しろしめ給う大御心の発顕にして天意なり。随って攻めるに非ず守るに非ず**自ら行って包容同化の大義を示す側業**なり。

これ実に我が国神武の淵源にして又武を学ぶ者の心致すべきところなり。

鹿島神流

鹿島神流は、倒敵破邪の愉悦を好むものに非ず
天下御治召し給う大御心に副い奉るの士を培うに在り

おもうに鹿島神流は、初において身体を整え
中において心気人倫を養い、**極めては宇宙創元の理**
を悟るに至るべし。

これ神流の奥義にしてこれ神なる日本本来の大道なり

鹿島神流

大義を重んじ、包容同化の精神を培養し、たとえ敵対者に対しても、日ごろ練磨した術技によって己を全うし、相手方の非を是正するところに真の武術の意義が存在する。術技を通じて、包容同化の精神如実に具現し得たとき、自他共に生存の実が生ずるので、神武(真武)の下に平和があり、平和の母体として武道が存在す。

心身を鍛錬し、万難不屈の大丈夫を養い、祖国日本のため全身全霊を尽くすのみ。

武は産(靈)

ム ウム

日本武道は産靈の業

荒魂の作用

**世界的禍津靈を修理固成し
和を取り戻すためには
荒魂の発揚が必要**

人間が為さなければ自然が為す

荒魂の時代へ

戦後日本人が喪った宝

日本文化の荒魂

日本文化の荒魂

八咫鏡

草薙太刀

八尺瓊勾玉

正直の本源

知恵の本源

慈悲の本源

決断の徳

常世の和

禊祓

現世の和

神人合一・時の和

八紘為宇・社会の和

日本文化の荒魂

太 刀
夕 ち
断 つ
決 断

決 断

1 決心ではなく決断

何を守り (最後は一つ)

何を捨てるか (後顧の憂いなく)

決 断

2 今、決断しておく

「いざとなれば」「その時が来れば」 はだめ
断つことはそんなに瞬時に決められない

常に決断しているから一貫した対処が可能
「ブレない」

決 断

3 死を特別にしない

為すがために生き、為すがために死す

決断した生様を命に託す瞬間(遷宮)

身(生活)を護るため

心を殺し

本心を裏切る

思いを断念する

武道は護身術に

心を護るため

本心に従い

思いを曲げず

身体を使いきる

身を捨て心を生かす武道

荒魂を顕現する者

神勅	侍	天兒屋命、太玉命
神話	大丈夫	五瀬命、大伴、佐伯
飛鳥まで	もののふ	物部
武門形成	武士	平、源、橘

【防衛奉護の神勅・紀一書】

天照大神、天兒屋命・太玉命に勅すらく
惟(ねが)はくは、爾(いまし)二神
亦た同じく殿(みあらか)の内に侍ひて
善く防ぎ護ることを爲せと。

国を守るとは国体を守ること。

神武天皇【日本書紀】

五瀬命、剣のたかみ撫(とりしばり)て
雄たけびして白(のたま)はく

「うれたかきかや、大丈夫(ますらお)にして、虜
(いやしきやっこ)が手を被傷(おい)て、報いずし
てや死(や)みなむとよ」

奈良時代の宿禰(武人)大伴家持

大伴の 遠つ神祖(かむおや)の その名をば
大来目主(おほくめぬし)と 負ひ持ちて 仕へし職(つかさ)
海行かば 水漬(みづ)く屍(かばね) 山行かば 草生す屍
大君の 辺(へ)にこそ死なめ かへり見は せじと異立(ことだ)て
大丈夫(ますらを)の 清きその名を 古(いにしへ)よ
今の現(をつつ)に 流さへる 祖の子どもそ 大伴と 佐伯の氏は
人の祖(おや)の 立つる異立て 人の子は 祖の名絶たず
君に まつろふものと 言ひ継げる 言の官(つかさ)そ
梓弓 手に取り持ちて 剣大刀 腰に取り佩き
朝守り 夕の守りに 大君の 御門の守り
我をおきて また人はあらじ といや立て 思ひし増さる

武士道の形成

大楠公遺訓

凡そ万物の始まる所は
本源の一種より生ず

大楠公
楠正成



楠公壁書

君の爲に身を捨つるを忠と云ふ

親の心に背かずして良く仕ふるを孝と云ふ
老いたるを敬ひ士卒を撫育し

國民を憐れむを仁と云ふ

一度び諾して變せず始終全きを義と云ふ
謙退辭讓を禮と云ふ

籌策を帷幄（いあく）の中に運らし

勝つことを千里の外に施すを智と云ふ
苟も虚言を構へず信を失ふべからず

遠慮なき者は必ず近憂あり

萬事に愁へず屈せず

過を改むるに憚（はばかる）ること勿れ
邪曲輕薄の人と交るべからず

大酒は失多し

色情は身を失ふ

心僻（ひが）むは嫉妬偏執の深きなり

儉約を専とし奢（おご）りを慎み

人の非を見て我身の行を正すべし

、愚なる故に壁書して慎とするのみ

大楠公奏上

北条高時の大逆
天誅いたすに仔細なし。

合戦の習いにて一端の勝負のみ
をお気に召されるべからず。

正成一人なお生きていと
聞召されば

聖運ついに開かれるべしと
思し召せ。



A large, green dragon sculpture is the central focus of the image. The dragon is depicted in a dynamic, coiled pose, with its head raised and mouth open, showing its tongue. It is surrounded by lush green foliage and trees. In the background, a traditional Japanese building with a tiled roof is visible. The overall scene is set in a park-like environment with soft lighting.

正成公は、圧倒的勢力の幕府軍に対し
赤城城そして千早城での拠点伏撃で
戦略持久戦を 戦い貫いた。
正成公が小城の 拠点を数ヶ月
持ちこたえている 間に

幕府軍恐るるに
足すとの風評が
全国に及び
反幕府勢力が
勢いを増して
ついに倒幕が
成立す。

これにより、後醍醐天皇が
隠岐から京に戻り建武の中興となる。

大楠公は自ら確信して
奏上した建策に固執せず
ただ朝命のまま忠順に
必死必敗の地に赴く。
朝廷のために
現実的戦果を挙げる合理性より
必死必敗の戦いに生命を捧げる
厳たる忠誠を守る道を選んだ。
勅命は一切の賢愚の判断に超絶する
との信条である。



大楠公最後の一念

正李公

七生ままで

唯同じ人間に生まれて

朝敵を

滅さばやとこそ存じ候

正成公

我も斯様に思ふなり

いざさらば

同じく生を替えて

此本懐を達せん

楠正成公

嫡男正行公（十歳）に遺訓す。
「生きて会えるはこれが最後。
父が討ち死にすれば
天下は尊氏になびくだらう。」



しかし、身命生き残らんがため
忠烈を失い

降参することのなきよう

一族全員義を貫き忠に死せ。

これが汝の第一の孝行である。」
とて訣別す。

小楠公 出陣



かえらじと
かねて思えば梓弓
なきかずにいる
名をぞとどむる

小楠公 弟正時と共に 四条畷に忠孝を遂げる



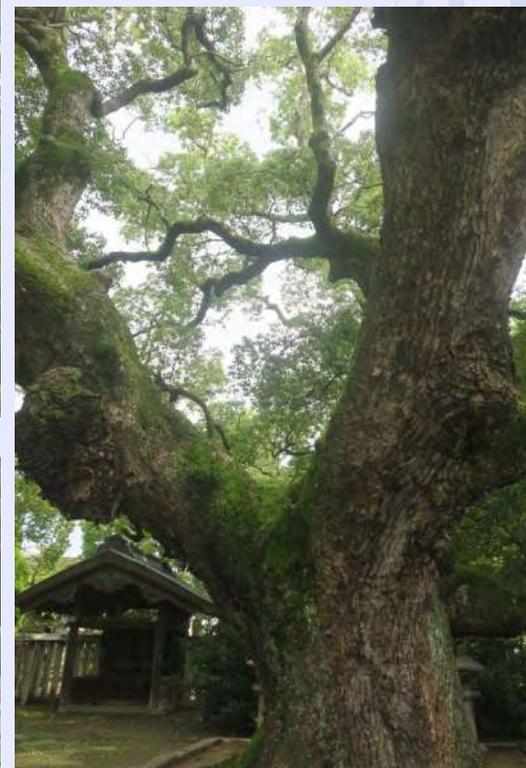
湊川神社 大楠公殉節地



新
土

平治三十年四月五日

小楠公墓所



七生報国（滅敵）

時を超越する命の一体感による粘り強い精神文化

成し遂げるまで
何度でも生を変えて行動する
今、自分が行動することに意味がある

山岡鉄太郎、将軍へ断言

官軍と徳川の関係が隔絶の中、徳川慶喜は恭順・江戸城明渡し
の意を西郷隆盛に伝える使者として山岡鉄太郎を呼び出し、朝
敵の命が下ったことを落涙して嘆いた。

これに対し山岡は、「何を弱きつまらぬ事を申さるるや。謹慎とは
偽りで何かほかにたくまれし事でもあるべきか」と問質すと、徳川
慶喜は「別心はなし、如何なることにても朝命に背かざる無二の
赤心なり」とこたえた。

この段に及んで山岡は「真の誠意を持って謹慎のことなれば、朝
廷へ貫徹し疑義の念を氷解するは無論なり、鉄太郎においてその
辺はしかと引き受け、必ず赤心の様尽力いたすべし。**鉄太郎目の
黒き内は決してご配慮あるまじき**」と断言した。

清水次郎長との縁

- ◆ 房総沖で台風にあい清水港へ入港した幕府海軍咸臨丸を官軍が襲撃し遺体を海に放投げた。
- ◆ “賊軍である咸臨丸の乗組員の遺体には触れるな、埋葬するな、この掟を破ったものは反逆者として厳罰に処する”との高札が立つ。
- ◆ この御触れと厳しい見張りによって、海に漂う遺体を誰も埋葬できず酷い死臭と景観になっていた。
- ◆ 次郎長は、お上に逆らい子分を動かして遺体を回収し供養す。直ぐに駿府藩役所より出頭命令、次郎長応えて曰く。
- ◆ 「死ねば仏だ。仏に官軍も徳川もない。仏を埋葬するのが悪いというなら、次郎長はどんな罪でも喜んでお受けいたします。」と答えた。

精神満腹



鉄舟の臨終

- ◆ 明治21年7月19日、山岡鉄舟(52歳)死去
皇居に向って、結跏趺坐で絶命
- ◆ その日、勝海舟(65歳)が鉄舟を見舞う
結跏趺坐の鉄舟に海舟が
「**どうです。先生、ご臨終ですか**」と問う
鉄舟はニコツとして「**さてさて、先生よくお出でくださっ
た。ただいま涅槃の境に進むところでござる**」と答え。
海舟は「**よろしくご成仏あれよ**」と言って辞去
自宅に戻るまでに使者が鉄舟の死を伝える。

日露戦争従軍記者マッカーラー(英国人)の手記

何たる超人間的の猛勇だろう！

何たる超自然的の不撓不屈だろう！

日本人ぐらい恐ろしいものはおそらくこの世に又とあるまい。この剽悍無比なる人種に対して、我々英国人も、フランス人も、ロシア人も、人間たる者からはなんら為すべき策もないのではなかろうか。

彼らの『死』と言う苦痛に対する観念は、我等が夕立にあって困るくらいにも思ってもいないのではなかろうか。

アメリカ軍にとって最もショックだったのは、硫黄島攻略線で日米の死傷者比率がほぼ1対1の同数になったことであった。

日本本土に近づくにしたがって、日本兵の抵抗は常軌を逸してくる。この調子で日本本土決戦を迎え、日本の兵隊のみならず国民までが非常識な抵抗をしたらどうなるのか。

沖縄戦でも同じ事が繰り返された。日本軍の戦意衰えず、それどころか、鬼気迫る異様さを帯びてきた。

毎日のように襲ってくる神風特攻隊の攻撃に、米艦隊の乗組員達はみな「神風ノイローゼ」になった。空母ワスプの搭乗員113名の健康診断をしたところ、わずかに30名が戦闘に耐えうる状態で、他は過労のため休養を必要とする状態であった。

多くの米軍兵士が死の覚悟で体当たりをしてくる特攻隊の攻撃に対して、神経をすり減らし恐怖心を感じていた。

沖縄戦に関しては、アメリカ側が敗者意識を持っているのである。実質的な敗戦である、と言うのがワシントンの受け止め方であった。

どうすれば日本との戦争を終わらせることができるのか、日本本土決戦にはどれくらいの犠牲を強いられるのか。

捕虜の日本兵に意識調査をした。日本兵は何のために死を賭してまで戦うのか、と聞くと、答えははっきりしている。それは郷土を守るためだ、父母や子供、兄弟、同胞を守るためだ、天皇を守るためだ、そのためであれば、日本人は命を捨てる、と圧倒的多数の捕虜が答えた。



世界が求めているサムライ精神

国際的武道指導を通じての発見

武道を通じた国際交流から

- ISBA設立趣旨 「武道は日本の伝統文化に根ざしたもので今日の世界的人類遺産のなかでも極めて価値あるもののひとつである。日本武道の精神は日本人のエートスとも言える基礎を形成している。我々の理想は、武道の稽古を通じて日本文化の伝統の真価を理解し、そこに**共通的に存在する**はずの我々自身の伝統とエートスを見い出すことである。それによって、我々は、世界の運命を正しく豊かな道へと導くため、**民族間の理解と親和を強化する**に努めようと思う。」(抜粋)
- CSBD設立趣旨 「武士道は私達に人間の原点に戻ることを教えてくれます。**心と精神と肉体が調和し、正しい判断のもと誠実に道徳的に行動することや、他人の利益のために自己を犠牲にすること**を恐れない日本の武士道は、世界に類を見ない崇高な精神です。」(抜粋)
- モスクワ大学武道クラブ設立趣旨 「武道は心身の涵養に資するもので、世界をよりよくし得るものであると確信している。武道の修練が我々の社会、ひいては世界全体に重要な結果をもたらすと考え、その実現のため、また、自己の人生を築き上げていく上でも価値のあるものであると判断する。」(抜粋)

国際セミナーでの祭典(平成二十九年ロシア)



フランス・セミナー開催趣旨 (平成23年8月)

市場中心のグローバル資本主義によって、我々は本来人類が歩むべき 正しい路線から著しく逸脱しつつあり、人類はおろか地球環境全体までも荒廃へと突き落とされかねない危機に瀕している。我々は、武道を通じて、この現状を再考し人間の本来の立ち位置に戻ることを提案したい。

武士道と騎士道

フランス留学生

- 騎士は貴族の奴隷の中から生まれ、後に教会が軍事力を所有するに際し、野蛮な騎士にキリスト教の倫理規範を宣誓させた。それが騎士道と呼ばれるものである。
 - この従属的倫理規範は、騎士にとって主に当たる教会と貴族が革命により失権したことで、完全に消滅した。
- 武士道は人間個人が主体的に確立する倫理規範であり、教会や貴族等の権力に従属するものではない。だから、フランスでは青少年の道徳教育に取り入れている。

騎士道文学の研究者ゴーティエの掲げる『十戒』

1. 不動の信仰と教会の教えへの服従
2. 社会正義の精神的支柱であるべき“腐敗無き”教会擁護の気構え
3. 社会的、経済的弱者への敬意と慈愛。
4. 自らの生活の場、糧である故国への愛国心
5. 共同体の皆と共に生き、苦楽を分かち合うため、敵前からの退却の拒否
6. 我らの信仰心と良心を抑圧・滅失しようとする異教徒に対する不屈の戦い
7. 神に対する義務と争わない限り封主に対する厳格な服従。
8. 真実と誓言に忠実であること
9. 惜しみなく与えること
10. 悪の力に対抗して、いついかなる時も、どんな場所でも、正義を守ること

テンプル騎士団に対して聖ベルナルが授けた騎士道
キリストの兵士が剣を持ち歩くのは、故ないことではありません。
それは邪悪を懲らしめ、正しい者の栄光のためなのです。

『修身二十則』(山岡鉄舟、十五歳)

- 一、嘘を言うべからず
- 一、君の御恩忘れるべからず
- 一、父母の御恩忘れるべからず
- 一、師の御恩忘れるべからず
- 一、人の御恩忘れるべからず
- 一、神仙ならびに長者を粗末にすべからず
- 一、幼者を侮るべからず
- 一、己に心よからず事 他人に求めるべからず
- 一、腹をたつるは道にあらず
- 一、何事も不幸を喜ぶべからず
- 一、力の及ぶ限りは善き方に尽くすべし
- 一、他を顧して自分の善ばかりするべからず
- 一、食する度に農業の艱難をおもうべし
草木土石にても粗末にすべからず
- 一、殊更に着物を飾りあるいはうわべを繕うものは
心濁りあるものと心得べし
- 一、礼儀をみだるべからず
- 一、何時何人に接するも客人に接するよう心得べし
- 一、己の知らざることは何人にてもならうべし
- 一、名利のため学问技芸すべからず
- 一、人にはすべて能不能あり
いちがいに入を捨て あるいは笑うべからず
- 一、己の善行を誇り人に知らしむべからず
すべて我心に努むるべし

「独行道」 宮本武蔵

- 一、世々の道をそむく事なし
- 一、身にたのみをたくまざ
- 一、よろづに依怙の(他を頼む)心なし
- 一、身をあさく思、世をふかく思ふ
- 一、一生の間よくしん(欲心)思はず
- 一、我事におゐて後悔をせず
- 一、善悪に他をねたむ心なし
- 一、いづれの道にも、わかれをかなしまざ
- 一、自他共にうらみかこつ(恨み嘆く)心なし。
- 一、れんぼ(恋慕)の道思ひよるところなし。
- 一、物毎にすきこのむ事なし
- 一、私宅におゐてのぞむ心なし
- 一、身ひとつに美食をこのまざ
- 一、末々代物なる古き道具所持せず
- 一、わが身にいたり物いみする事なし
- 一、兵具は各(格)別、よ(余)の道具たしなまざ
- 一、道におゐては、死をいとはず思ふ
- 一、老身に財宝所領もちゆる心なし
- 一、仏神は貴し、仏神をたのまざ
- 一、身を捨てても名利はすてず
- 一、常に兵法の道をはなれず

海外門人の武道観(1)

- ◆ 私達は皆、恩恵を与えてくれた祖先に借りがあり、その借りを次世代に返す役割があります。この**恩恵に対する「感謝のころ」**は伝統的社会では受け継がれていても、個人主義的な現代社会では失われています。日本の社会には**「感謝のころ」**がしっかりと認識され、存在している事を知りました。この**「感謝のころ」**が、日本だけでなく、世界の国々の多くの文化で**共感できる価値観**だと思います。この**「感謝のころ」**を持つことによって、人々が同じ土台に立てるのです。(イスラエル、哲学博士)
- ◆ 日本の文化には、**他人に対する思いやりとコミュニティーの統合力**が存在します。日本人は気がつかれないかもしれませんが、**他人への配慮や思いやりの文化**は、日本社会の隅々まで浸透している神道のお陰だと私は確信しています。**祖先を崇拝し、自然や人々との親交を大切に**する考えは人間が存在する本来の意味であると思います。(イギリス、エンジニア)

海外門人の武道観(2)

- ◆ 欧州の人々は、合気道のような**他人を傷つけない武道、敵に戦いを放棄させるよう促す鹿島神流の技や「活人剣」という考え方が存在する事に驚きます。敵を傷つけ殺す為にある欧州の武術ではとても珍しい事です。**
(ポーランド、ITエンジニア)
- ◆ 武道は、**自分の能力を共同体の善に貢献し、それによって共同体に恩返しをする為に自分の全て使う人になる**ことです。
(ドイツ人、学生)
- ◆ 際立った大任であろうが、日常生活の俗務であろうが、それぞれの**課題に全力で、専心に、内面的正しさや真っ直ぐな精神で取り組む**ことが武道であるということを知りました。
(ロシア人、教員)

海外門人の武道観(3)

- ◆ 武道を学ぶことによって、**生きている限り誠実であれ**ということを学んだ。もし、自分のためにだけ生きるとしたら、死後、何も残るものはない。この人生を意味のあるものにするには、**他のために生きること**である。「この生き方がなんの役に立つのか」という問いに対して私の答えは、**目に見えない精神レベルで私達は一つであるからだ**ということだ。**人を助けることによって、その一つの存在を癒し、力を与えることに関わって行く**ということである。

死する事は難しいことではない。それよりも、正しく生きることの方が困難なことである。誠実であれということは、たとえそれが敵対するものに対してもである。**誠実であるということは日本の美徳**である。**他者のための自己犠牲を日本の武人は体顕した**。これが真の武道の目的であり意味である。 (ロシア、公務員)

日本の武道に何を求めているか

- 従属ではなく主体性
- 殺傷ではなく創造(殺人剣と活人剣)
- 対立(個)ではなく和(共同体)
- 結果(合理性、効率性、個人利益)より
プロセス(伝統重視、テマヒマ、集団の安定)

フォーム、コピーがオリジナル、創造的主体

ドーバー海峡での禊



ドーバー海峡での禊



ドーバー海峡での禊



ドーバー海峡での禊

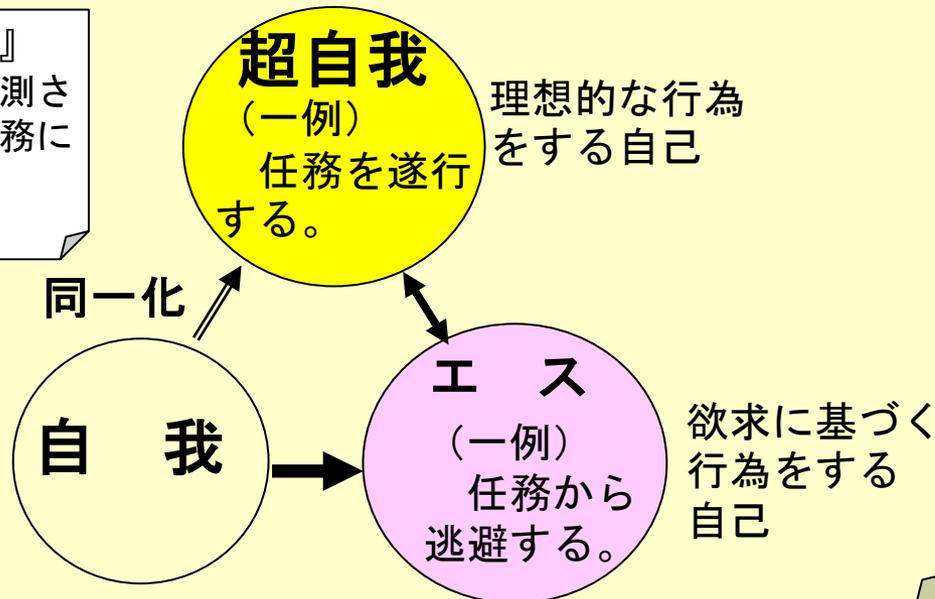


行動心理学から（１）

自己犠牲の精神構造

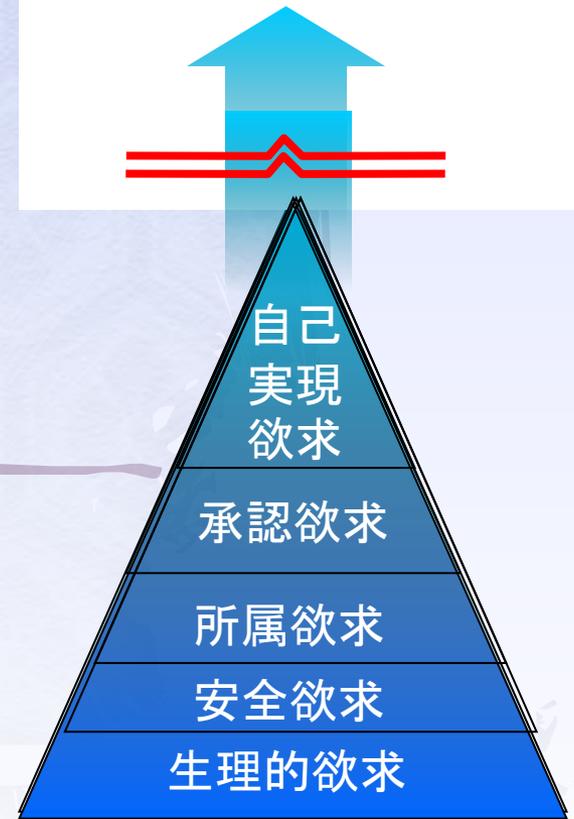
- 自我が、超自我へ同一化することを選択した状況では、自己超越の欲求に移行
- 自我が、エスへ同一化することを選択した状況では、自己実現欲求のみにとどまる。

『状況』
死が予測される任務に
直面



【フロイトの精神構造論から】

自己超越の欲求
(自己犠牲)



【マズローの欲求段階から】

行動心理学から

超自我への同一化の条件(フロイトの精神構造論から)

厳格な任務への同意

(後醍醐天皇への奏上)

「正成一人尚生きて有りと聞こし召され候
はば聖運遂に開かるべしと思し召され候」
—楠正成・正李—



楠正成

(慶喜恭順の意を官軍に伝達)

「鐵太郎、眼の黒き内は決してご配慮ある
まじき」と断言す。 —山岡鉄舟—



山岡鉄舟

任務に基づく行動の結果の容認

(江戸への護送下での詠歌)

「かくすればかくなるものと知りながら
已むに已まれぬ大和魂」 —吉田松陰—



吉田松陰

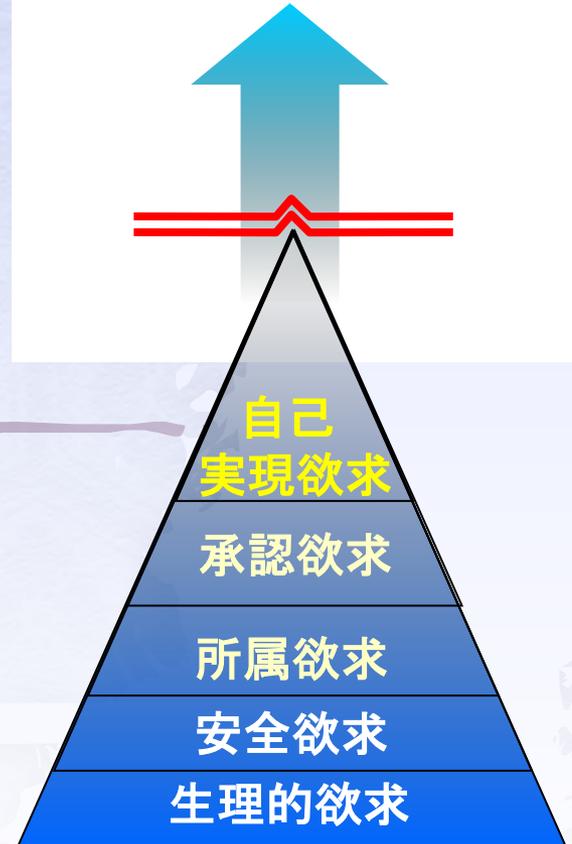
群衆との差別化

「道を行う者は、天下挙て誇るも足らず
とせず、天下挙て誉めるも足れりとせざるは、
自ら信ずるの厚き故なり」
—西郷隆盛—



西郷隆盛

自己超越の欲求 (自己犠牲)



【マズローの欲求段階】

◆ 惨なるは心死（しんし）より惨なるはなし。けだし身死して心（こころ）死せざるものは古聖賢の徒、不朽の人なり

◆ 世には身生きて心死するものあり。身亡びて魂存するものあり。心死さば生も益なし、魂存せば亡も損なきなり。死して不朽の見込みあらばいつにても死ぬべし。生きて大業の見込みあらばいつにても生くべし。

『至誠の書』

吉田松陰

◆ 我れ純一無雜、必死三昧の境に立ち、身を肉醬になして敵を必死せんと願欲する念慮氣迫、驀直端的に敵の心に透徹と貫き、感動とひびけば巧手上手のわざも用に立たぬぞ

◆ 此の所我が絶命の地にて、只今國恩を報ずるの時節到来せりと心得て踏み込むで無ければ、決して先登はならぬぞ

『劍徴』

忠孝真貫流

平山子竜

◆ 大難大變に逢て動転せぬというはまだしきなり。大難大變に逢うては歡喜踊躍して勇み進むべし

◆ 武士道とは死ぬことと見つけたり。二つ二つの場にて早く死方に片付ばかり也。毎朝毎夕、改めては死々常住死身に成て居る時は、武道に自由を得、一生落度なく家職を仕課すべき也

『葉隱』

山本常朝

◆
道を行ふ者は、固より困厄に逢ふものなれば、如何なる艱難の地に立つとも、事の成否、身の死生杯(など)に少しも関係せぬもの也。

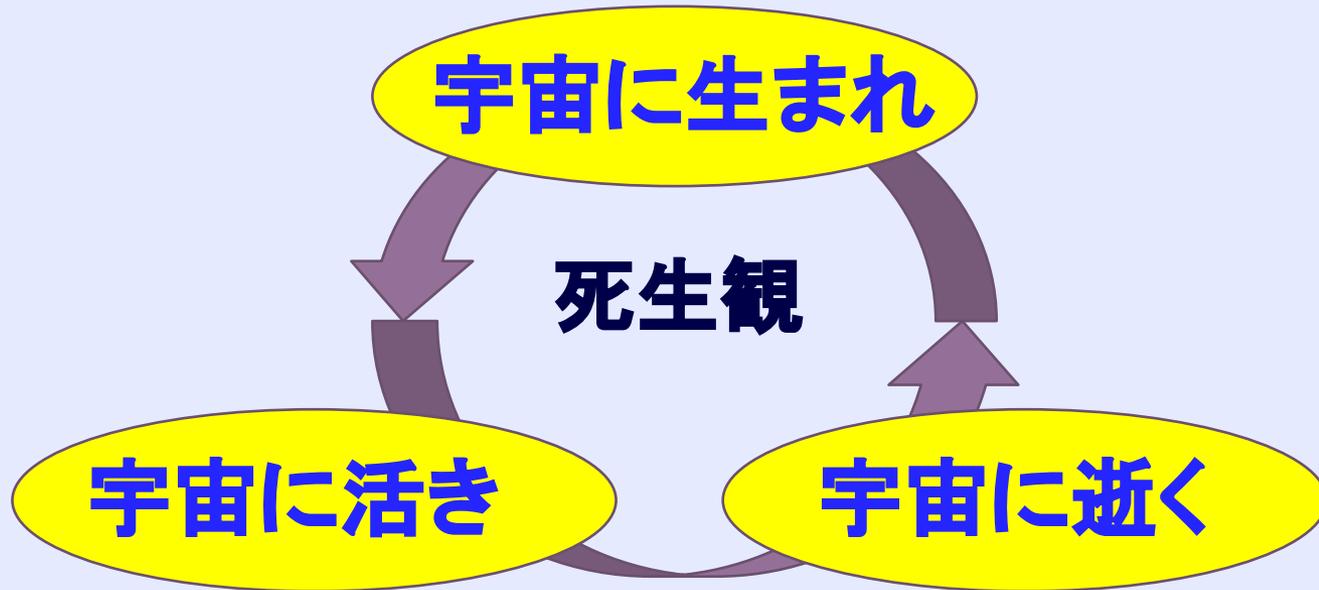
事には上手下手有り、物には出来る人、出来ざる人有るより、自然心を動かす人も有れども、人は道を行ふものゆえ、道を踏(ふ)むには上手下手も無く、出来ざる人も無し。故に只管(ひたす)ら道を行ひ、道を楽しみ若し艱難に逢ふて、之を凌(しの)がんとならば弥々(いよいよ)道を行ひ、道を楽しむ可し。

◆
命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして、国家の大業は成し得られぬなり。去れども个様の人は、凡俗の眼には見得(みえ)られぬ。道に立ちたる人ならでは、彼の氣象は出ぬ也。

◆
正道を踏み、国を以て斃るるの精
神無くば、外国交際は全かる可
らず。彼の強大に畏縮し、円滑を
主として、彼の曲げて彼の意に従順す
る時は、軽侮を招き、好親却て破
れ、終に彼の制を受るに至らん。

◆
談国事に及びし時、慨然として申
されけるは、国の凌辱せらるるに
当たりては、縦令(たとひ)国を以
て斃るとも、正道を践み、義を尽
すは政府の本務也。然るに平日、
金穀理財の事を議するを聞けば、
如何なる英雄豪傑かと思ゆれども
血の出る事に臨めば、頭を一処に
集め、唯目前の苟安(こうあん)を
謀るのみ、戦の一字を恐れ、政府
の本務を墜(おと)しなば商法支配
所と申すものにて、更に政府には
非ざる也。

中 今



- 全ての生命に意味がある
- 日々全身全霊で生きる
 - よく生き死を恐れず
 - 滅私奉公、七生報国(地球史で考える)

自己の認識

天地(宇宙・自然)を知り己を知る

生まれ成った生命(産霊)

限られた生をどう活かす(気張る)

命に帰する(神に成る)

自由の境地

**死を受容した時
あらゆる拘束から解放され
心身の自由を得る**

大丈夫の気概

一切の合理性・有効性を排した
大丈夫の精神



いかに戦うか

攻勢



戦 闘 : 攻撃行動を伴う意志表明

抵抗戦: 小規模な敵対行動を伴う意志表明

顕在的不敗: 意志表明はするが敵対行動をとらない

潜在的不敗: 意志は屈してないが表には出さない

防勢

意志表明はするが敵対行動をとらない

- ◆ 言論による意志表示
- ◆ 教育による意志の普及
- ◆ 意志を具現する活動
- ◆ 意志の沿った生き方・生活
- ◆ 意志に沿った社会創り



武の目的－何のための「武」か(1)

- 宇宙、自然、国家、郷は一体として成長する生命共同体。
 - 神社は集団の祈り(祝詞)→横の繋り、共生共存共栄の思想
 - 個人の成長と社会の成長は一体(情けは人の為ならず)
 - 和の文化、絆、共助、在所共同体(里、郷、村)
 - 利他は徳、人様に迷惑をかけない、思やり
 - **世の為人の為**
- 氏神様は歴史的一体性の柱
 - 縦の繋り「祖先と共に生きる(神ながらの道)」
 - **先祖の生まれ変わり(魂の継承)**
- 祭りは全員参加の共同事業
 - 自立するために協力、社会は共同運営
 - 全ての人に役がある(**和を守る、武の役を果す**)

武の目的－何のための「武」か(2)

- 中今思想:過去は今に集約し、未来は今から創造する
 - 今に生きることの歴史的責任を果す
 - 一人ひとりが歴史への貢献(家を守る、里を守る、国を守る)
- 神、天皇、戸主は、しろしめし、きこしめし、みそなわす
 - 日本のリーダーシップは「範を示し心を知る」
 - 受容と祈りと恩にたいする報恩感謝(忠孝、大御心を奉体)
 - 家族は一つ、君民一体、神人一如
- 人は神より生まれ、神に還るなり
 - 人間の生死は、地(地球)から頂いた「生(身体)」と、天(宇宙)から頂いた「命(霊)」を元に還すこと(循環還元)
 - 宇宙に生まれ、宇宙に生き、宇宙に逝く
 - よく生き死を恐れず(滅私奉公、七生報国)

武の目的－何のための「武」か(3)

○自然崇拜－自然を祀る(自然との魂の繋がりを持つ)

- 自然(神)と共に生きる。「神ながらの道」
- 自然の一部としての在所共同体。
- 土地に根ざす全てを豊かにする。
- 農は自然との共同作業、労働＝生命活動に参画する喜び
- 収穫の祈りは誓い(祈年祭)、**一所懸命、一生懸命**
- 恵みには感謝(新嘗祭)、**報恩感謝、郷・国・神を守る**

○自然も人間も神々の子孫。万物は神性を内在。

- 自分も神であるという自覚
- **神であるべき自分、祖先の魂、英霊に恥じる → 自己奮起**
- **神に近づく練磨**

正調黒田節

皇御国の武士は

いかなる事をか勤むべき

ただ身に持てる真心を

君と親とに尽くすまで

禊 祓

直霊の顕現【和魂】

禍津霊を直霊に復元する作用【荒魂】

